

むちゃ食いを呈する摂食障害患者における代償行為のタイプと心理社会的要因の検討

浦上 涼子

<問題と目的>

痩せていることを善しとする社会文化的風潮が、近年の摂食障害患者の増加に影響しており、特にむちゃ食いを呈する症例の増加が報告されている(切池, 2003)。そして、むちゃ食いに伴う代償行為(自己誘発嘔吐など)が摂食障害の病態水準や機能障害を悪化させる一要因であることが明らかとされている(松本他, 2001)。しかしながら、わが国における痩せに関するメディアや身近な人物からの影響、瘦身理想の内在化といった心理社会的要因の検討が不十分であると指摘されている。また、代償行為のサブタイプ(排出・非排出)における摂食障害の病態水準などについては多くの検討がなされている一方で、そのサブタイプのリスク要因について検討した研究はごく少ない。そこで本研究は、①摂食障害に関連する心理社会的要因について臨床群と健常群の比較検討、②瘦身理想の内在化がメディアの影響や体型不満感などに及ぼしている影響の検討、③代償行為の内容に基づく臨床群のサブタイプに、心理社会的要因がリスク要因となりうる程度の検討を行った。

<方法>

むちゃ食いをを行う摂食障害患者(臨床群)と食行動の問題のない女子大学生(健常群)を対象に質問紙調査を実施した。調査材料は、①EDI-2の過食、痩せ願望、体型不満感、②EATのダイエット、③賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、④身近な人物(親, 同胞, 友人)からの影響、⑤メディアの影響に関する社会的圧力、情報の取り入れ、瘦身理想の内在化、⑥自尊感情、⑦抑うつ感、不安感であった。

<結果と考察>

〔結果1〕全測定尺度の平均得点について比較検

討を行った。臨床群の過食、痩せ願望、ダイエット、社会的圧力、瘦身理想の内在化、抑うつ感の平均得点が健常群よりも有意に高いことが示された。以上の要因に関する治療的・予防的介入を行う必要性が示唆された。

〔結果2〕各群を瘦身理想の内在化の得点で高群と低群に分け、社会的圧力、情報の取り入れ、EDI-2下位尺度、ダイエットの得点を比較検討した。瘦身理想の内在化の高群において、社会的圧力、情報の取り入れ、痩せ願望、体型不満感が低群よりも有意に得点が高いことが示された。瘦身理想の内在化が痩せに関するメディアの影響を受けやすくさせ、摂食障害症状を高める危険性のあることが示唆された。

〔結果3〕臨床群を代償行為の内容に基づきサブタイプに分け、各々に心理社会的要因が及ぼしている影響に関して検討を行った。全ての代償行為による検討では、過食、ダイエット、拒否回避欲求がリスク要因となりうるということが示された。排出行為による検討では、嘔吐のみのサブタイプに過食と拒否回避欲求がリスク要因となりうるということが示された。非排出行為による検討では、過食、母親や同胞からの影響、瘦身理想の内在化がリスク要因になりうるということが明らかとされ、とりわけ過食が強いリスク要因であった。過食と拒否回避欲求がいくつかのサブタイプに影響を及ぼしており、代償行為について検討や介入を行う際には、その有無に注目する必要性が示唆された。

本研究の結果から、摂食障害における従来の治療や予防的介入に加え、食の問題に影響を及ぼす社会的な要因も同時に扱うことで、その効果を高められる可能性が示唆された。

<主な文献>

切池信夫(2003)。摂食障害の病態研究。分子精神医学, 29, 997-1002。

松本聰子・佐々木直・熊野宏昭・久保木富房・野村 忍・坂野雄二・成尾鉄朗・野添新一(2001)。摂食障害のサブタイプにおける認知的障害の程度は同じか?—認知行動理論からの検討—。心身医学, 41, 530-537。